

奥三河の観光ハブステーションを目指して

愛知県新城市 建設部 都市計画課

はじめに

新城市は、平成17年10月1日に新城市、鳳来町、作手村の新設合併によって誕生しました。

愛知県の東部、東三河の中央に位置し、東は静岡県に接しています。東西約29.5キロメートル、南北約27.3キロメートルで、県内2番目の広さとなる499.23平方キロメートルを有しており、市域の84パーセントは、三河山間部を形成する豊かな緑に覆われ、東三河一帯の水源の役割を果たしています。

また、桜・紅葉が美しく、「三河の嵐山」とも呼ばれる桜淵公園や、霊鳥仏法僧（コノハズク）の棲む山として全国的に知られ、国の名勝に指定されている鳳来寺山など、市域に広がる国定公園・県立公園の指定区域には、特徴ある地形や豊かな植生、美しい景観が点在して訪れる人を魅了しています。

このほか夏でも涼しくレジャースポットとして人気のある作手高原、1,300年の歴史を誇る湯谷温泉、里芋・お茶・梅・高原野菜など風土を活かして産出される特産品、素人歌舞伎・田楽をはじめとする数々の伝承芸能など魅力いっぱいの地域で、春の桜まつり・古城まつりや秋のもみじまつりなど四季折々のイベントが目白押しです。中でも、長篠・設楽原の戦いで知られるこの地では、5月の長篠合戦のぼりまつりや7月の設楽原決戦場まつりなどでは、火縄銃実演の演武もあり、来場者を魅了します。



長篠合戦のぼりまつり



四谷の千枚田

本市における道の駅の状況

本市には、都市と山村の交流による地域の活性化を推進するための拠点施設として平成5年の道の駅制度創設と同時に認定された鳳来三石（旧鳳来町）と平成13年に認定されたつくで手作り村（旧作手村）の2つの道の駅があります。

今回、新東名高速道路新城インターチェンジが開通すると、この地域の新たな玄関口となることから本市では3番目の道の駅となるもっくる新城を整備することとなりました。

平成27年3月に開駅した、もっくる新城は、平成27年度末に開通が予定されている新東名高速道路新城インターチェンジと国道151号の結節点に位置しています。

国道151号は、長野県飯田市から愛知県豊橋市に至る一般国道で、江戸時代には伊那街道とも呼ばれ、本市の中央を通っています。

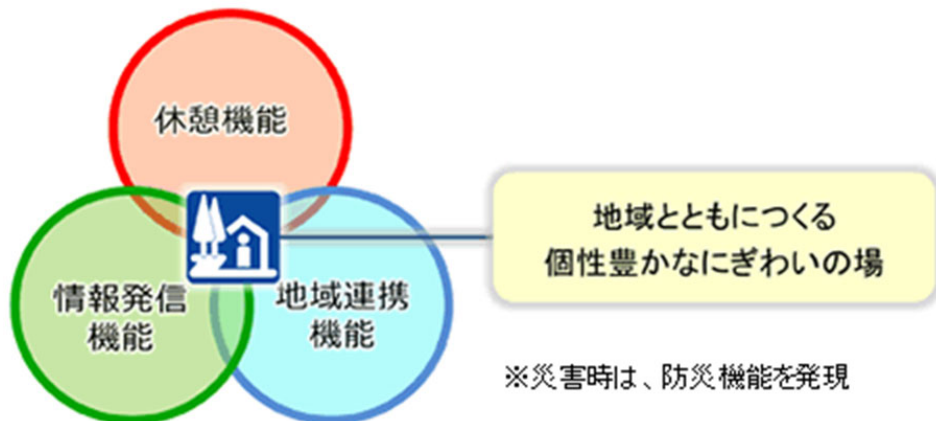
また、この道は、一級河川豊川とも並行しており、かつて豊川を使った川舟の舟運から馬の背の陸運への結節点として繁栄していました。往来する馬を浪に例えた、「山湊馬浪」（山の湊に馬が浪のごとく往来する）という言葉で当時をしのぶことができ、国道151号は、現在も、生活、産業、観光を結ぶ基幹道路となっています。



案内図

(道の駅とは)

「道の駅」は、駐車場やトイレなどの「休憩機能」、道路情報や地域情報を提供するための「情報発信機能」、地域との交流によりその地域が持つ魅力を知ってもらう「地域連携機能」の3つの機能を併せ持つ施設です。



※「道の駅案内」国土交通省 HP より

もっくる新城の取組

もっくる新城の設計コンセプト

- ① 新城（奥三河）の木材をふんだんに使った人にやさしい施設
- ② 「道の駅」から「まちの駅」へ人が集まる施設
- ③ 世代間の交流の促進に寄与する施設



① 地域産材の活用

建物の構造材は、全て愛知県認証材を使用しており、杉、桧については、地元の奥三河産の木材を使用しています。木材をふんだんに使用し、木の香りがただよう、温もりを感じる施設となっています。建物の形状は、大きなアーチ型の建物で、遠方からでも目を引く建物となっています。建物内部からは、木組みを見ることができ、長篠設楽原の戦いで織田・徳川連合軍が使用した「馬防柵」をイメージしています。木造でありながら大断面を有する構造で、広い空間が確保されています。建築工法は、在来軸組工法を採用しています。また、規格寸法の製材を利用し組み合わせることにより、地域の工務店でも建設可能な工法となっています。



玄関を望む

② 人が集まる「まちの駅」へ

道の駅は、地域外からの来訪者を対象とした観光施設として捉えられがちですが、もっくる新城は、そういった来訪者はもちろん、地元の人にも愛され利用していただける「まちの駅」を目指しています。

屋外ステージには、四谷千枚田の棚田をイメージしたベンチを設け、奥三河地域の伝統芸能や地域で活動するグループの発表の場として、来訪者だけではなく地元の人にも楽しめるイベントを計画しています。

来訪者や地域の人々、老若男女さまざま世代が楽しみ交流施設を目指しています。



もっくる新城全景



イベント風景

③ 交流を促進する「奥三河の観光ハブステーション」として

もっくる新城の基本コンセプトは、「奥三河の観光ハブステーション」としてしています。新東名高速道路を利用された方が、奥三河地域の玄関口に位置するもっくる新城で、本市をはじめ奥三河地域の観光情報を入手し、ここから、奥三河の観光地へ訪れていただくものです。

本地域の観光は、周遊性を高めることが課題となっています。この地域には、豊かな自然や歴史、文化があります。それぞれが魅力的な観光資源をもっくる新城が拠点となり、各観光地をつなぐ、広域観光の中核的施設の役割を担うことが期待されています。もっくる新城の観光案内所には、観光案内人が常駐し、この地域



観光案内所

の旬な観光情報を提供しています。

また、トイレにも観光的要素を組み込んでいます。男性用トイレは、馬防柵をイメージした木組みが特徴となっています。女性用トイレの壁面には、奥三河の観光名所の写真がプリントされており、奥三河地域の魅力をPRしています。

また、足湯を設けています。この足湯は、もっくる新城から自動



女性トイレ



足湯

車で30分程度のところにある開湯1,300年の歴史を持つ湯谷温泉のお湯を利用しています。もっくる新城の利用者の休憩の場としてだけでなく、湯谷温泉のPRの場ともなっています。

④ 新たな地域資源の活用による地域の活性化へ

「道の駅」は、安全で快適に道路を利用するための道路交通環境の提供をするだけでなく、地域のにぎわい創出を目的とした施設で、地域とともにつくる個性豊かなにぎわいの場ともなっています。

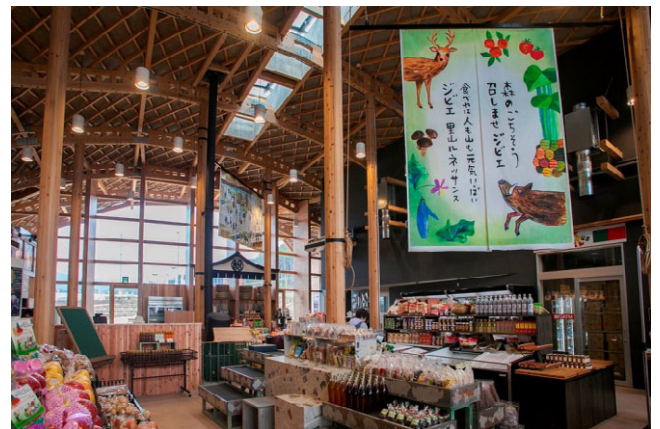
もっくる新城では、地域でとれた新鮮野菜の販売や土産品、地元食材を使ったこだわりの焼きたてパンを販売しています。また、フードコートでは、地元野菜を使ったお惣菜バイキングや有害鳥獣害駆除等で捕獲されたジビエ食材を使用した“ししラーメン”を提供しています。中山間地域である本市にとって、野生鳥獣による農作物の被害は深刻な問題となっています。ジビエを活用することにより、今まで害獣でしかなかったものが、新たな地域の資源となることで地域が活性化する一つの要因となることが期待されます。



ししラーメン



フードコート（お惣菜バイキング）



物販店舗（産直、土産品）

⑤ 大災害に備える防災拠点として

新東名高速道路新城インターチェンジを降りると木製のサインが目に入ります。これは、もっくる新城のサインを兼ねた木製の受水槽です。新城産の杉材を利用し、市内の工場で作られたものです。

木製の受水槽は、この施設の景観にマッチするだけでなく、断熱性が良く水温が安定することや遮光性が高く、藻が発生しないなどの効果もあります。

この受水槽は、災害時の水の確保も兼ねており、この施設のおよそ3日分の水が利用できます。また、受水槽のほか、自家発電装置も設置しており、建物への電力供給を行うとともに浄化槽も利用可能な状態となることから災害時でもトイレを利用することができます。

もっくる新城の隣接地には、愛知県の道路防



サインを兼ねた木製受水槽

災施設が建設中であり、大規模災害時には、県の施設と連携し、支援車両の集合場所や支援部隊の休憩場所、支援物資の集配送等の拠点となることを想定しています。

維持管理コストの縮減

もっくる新城は、観光案内施設（足湯を含む）を除き、指定管理者制度により施設の管理運営を行っています。運営者の視点に立った使用し易い施設とするため、基本設計段階から運営者の意向を反映させています。

指定管理による市からの指定管理料は、支出しておらず、施設の運営により利益が生じた場合は、指定管理者から市へ維持管理費負担金として、利益に応じた金額を市へ納入していただくこととなっています。維持管理費を削減するため、電球にLEDを採用したり、太陽光発電等を導入しています。また、緑地管理を軽減するため、クラピアにより緑化を図っています。

おわりに

日本創生会議の試算によると、本市は愛知県内の市では唯一の「消滅可能性都市」とされています。少子・高齢化による過疎化、人口減少が急速に進んでおり、いかにして人口減少に歯止めをかけるかが喫緊の課題となっています。

もっくる新城は、道路利用者にとっての休憩施設としての役割だけを担うものではありません。

平成 27 年度末に予定されている新東名高速道路新城インターチェンジの開通を絶好の機会と捉え、もっくる新城が、奥三河の観光ハブステーションとして、この地域の拠点施設となり、交流人口の増加や地域に根差した産業や雇用の創出を図る地域活性化への貢献が期待されています。

地域の活性化については、本市のみならず国、県のご尽力が必要と感じております。今後さらなるご支援ご協力を賜りますことを切に望みます。